

公立はこだて未来大学 2017 年度 システム情報科学実習
グループ報告書

Future University Hakodate 2016 System Information Science Practice

Group Report

プロジェクト名

大型イカロボの開発・活用デザイン

Project Name

Development of Large Squid Robot and Practical Use of Design

グループ名

企画運営班

Group Name

Planning and Management team

プロジェクト番号/Project No.

14-A

プロジェクトリーダー/Project Leader

1015093 岩代惟 Iwashiro Yui

グループリーダー/Group Leader

1015219 市口智幹 Ichiguchi Tomoki

グループメンバ/Group Member

1015219 市口智幹 Ichiguchi Tomoki

1015198 岩田和記 Iwata Kazuki

1015070 岩田和樹 Iwata Kazuki

1015207 佐藤一輝 Satoh Kazuki

1015024 荒尾元紀 Arao Motoki

1015178 井本隆太 Imoto Ryuta

指導教員

松原仁, 鈴木恵二

Advisor

Hitoshi Matsubara, Keiji Suzuki

提出日

2017 年 1 月 29 日

Date of Submission

Jan. 29, 2017

概要

このプロジェクトでは、函館市の抱える問題の 1 つである観光客の減少に対する解決策として函館観光用ロボット IKABO を制作してきた。私たち企画運営班は IKABO ロボットの知名度を向上させることにより最終的に函館の観光資源として函館の地域活性に貢献できると考えている。プロジェクトメンバー全 14 人のうち 6 人が所属しており、イベントの企画考案、関係者との連絡、ポスター制作やメディア出演などの広告活動、IKABO の知名度調査のためのアンケートの製作や実施などイベントの企画運営に必要な多くの仕事を適宜分担して行っている。

キーワード 函館観光用ロボット IKABO, IKABO, ポスター, メディア, 企画, 運営, 知名度

(※文責：岩田和樹)

Abstract

In this project, We are making IKABO as tourism resources of Hakodate. Because I think that I would like to increase the number of Hakodate tourists further. We believe that the enhancement of IKABO's reputation will lead to regional reconstruction of Hakodate. Six people belong to this group. The work content is

Planning an events, Contact with stakeholders, Making a poster, Doing public relations activities on TV and newspapers, Making a questionnaire and Taking a questionnaire. We share these appropriately.

Keywords IKABO, goods, extracurricular, poster, media, planning, operation profile

(※文責：岩田和樹)

目次

1 章	はじめに	
1.1	背景	6
1.2	プロジェクト開始時の現状と問題	6
2 章	目標	
2.1	今年度の課題の概要	6
2.2	今年度の目標	7
3 章	チーム課題解決のプロセス	
3.1	前期の活動	7
3.1.1	函館山	7
3.1.2	港まつり	8
3.1.3	その他の活動	9
3.2	後期の活動	
3.2.1	木古内道の駅	10
3.2.2	五稜郭タワー	11
4 章	中間発表会・成果発表会での評価	
4.1	中間発表会の評価	
4.1.1	集計	12
4.1.2	解析	12
4.1.3	検討	13
4.1.4	評価	13
4.2	成果発表会の評価	
4.2.1	集計	13
4.2.2	解析	13
4.2.3	検討	14
4.2.4	評価	14
5 章	個人課題解決のプロセス	
5.1	市口智幹	
5.1.1	プロジェクト内における役割	14
5.1.2	課題の概要	15
5.1.3	担当課題解決過程の詳細	15

Planning and Management team

5.1.4	担当課題と他の課題の連携内容	16
5.1.5	担当課題の評価	16
5.2	岩田 和記	
5.2.1	はじめに	16
5.2.2	活動の目標設定	17
5.2.3	前期の活動	17
5.2.4	後期の活動	18
5.2.5	まとめと今後の課題	18
5.2.6	プロジェクトの成果として得られたこと	19
5.3	岩田 和樹	
5.3.1	プロジェクト内における位置づけ	19
5.3.2	課題の概要	19
5.3.3	担当課題解決過程の詳細	20
5.3.4	担当課題と他の課題の連携内容	22
5.3.5	担当課題の評価	22
5.4	佐藤一輝	
5.4.1	プロジェクト内における位置づけ	23
5.4.2	課題の概要	23
5.4.3	担当課題解決の過程	23
5.5	荒尾元紀	
5.5.1	プロジェクト学習の最終目標や計画	25
5.5.2	課題解決過程の詳細	26
5.6	井本隆太	
5.6.1	プロジェクト内における役割	28
5.6.2	課題の概要	28
5.6.3	担当課題解決過程の詳細	29
5.6.4	担当課題と他の課題の連携内容	32
5.6.5	担当課題の評価	32
6章	結果とまとめ	
6.1	前期の結果	32
6.2	後期の結果	
6.2.1	函館港まつり	33
6.2.2	木古内イベント	33
6.2.3	五稜郭イベント	33
6.3	まとめ	34

7章 今後の課題と展望 34

付録 相互評価

市口智幹 35
岩田和記 35
岩田和樹 36
佐藤一輝 36
荒尾元紀 37
井本隆太 37

1 章 はじめに

1.1 背景

そもそも本プロジェクトにおける IKABO とは、2005 年に「函館をロボットの発信基地にする一大イベントを立ち上げて、函館の活性化に寄与したい」という理念のもと活動するロボットフェス・インはこだて市民の会からの依頼で作られたロボットである。当初は青森のねぶた祭りのシンボルであるねぶたのように、港まつりのシンボルにしたという理由から 5m ほどのイカロボットを作成する予定であった。しかし、いきなり大型のロボットを作成するのは危険性が高いため、試験的に作られたのが 2006 年に完成した函館観光用ロボット IKABO1 号機である。IKABO は函館高等専門学校と共同開発をしていた為、本プロジェクトにおける IKABO のナンバリングは奇数番号となっている。今年度制作された 11 号機は本プロジェクトでは 6 機目であり、港まつりの高さ制限である 3.5m とほぼ同じ高さで制作されている。私たち運営班は、これらの IKABO の知名度を上げるため IKABO を用いた様々なイベントの企画運営、メディアを利用した広報活動など様々な活動を行うチームである。

1.2 プロジェクト開始時の現状と問題

前年度は IKABO11 号機完成当初であったことに加え、IKABO11 号機の運送費が高額であったため、最低限のイベントの運営しか行われていなかった。そこで、今年度は限られたプロジェクト費用の中でいかに盛り上がるイベントをたくさん行えるかが問題であった。

(※文責:岩田和樹)

2 章 目標

2.1 今年度の課題の概要

前年度はイカボ 11 号機が開発当初だったのと運搬にかかる費用が高額だったために最低限のイベントしか行うことができなかった。そこで、今年度は限られた時間の中で、いかに盛り上がり、老若男女問わず楽しめるイベントを行えるのかを課題としてプロジェクトを行った。そのために解決しなければならない課題は、まずはイベントを行う場所である。どの層に来てもらいたいのかを考えながらイベントを行う場所を決めていくのが大事になってくると考え、全体で話し合いを行った。具体的なイベントの場所は観

光客をターゲットとする場合は函館山や五稜郭タワーなどの観光名所、地元の人をターゲットにする場合は函館で開催されているお祭りや駅などでのイベントとした。また中高生に特にイカボを知ってもらいたいと考え、観光名所や駅でのイベントなどでは効果が薄いと考えた。そこで、中高生の方には SNS やインターネットを使った PR 方法を考え課題解決を行いたいと考えた。引継ぎについての課題もあると考えた。イカボはこれからも使われていくものなので今年どのようなことをしていたのかをしっかりと引き継ぐ必要がある。

(※文責:荒尾元紀)

2.2 到達目標

大型イカロボの開発と運営では、イカロボット 11 号機の今年度設定した課題の到達目標は、以下のように設定した。まずイカロボット 11 号機の知名度についての課題は、アンケートでの知名度を前年度の 40%を上回る 50%にすることを今年度のプロジェクト活動の到達目標とした。50%に設定した理由は、まず、前年度の知名度を上回することは必要最低限であり、尚且つ 1 年間で知名度を 60%や 70%まで大幅に上げることは現実的に考えて難しいという結論に至ったので 50%という数字に設定をした。この知名度調査のアンケートはイベントの時に行うアンケートや、函館の複数の高校の生徒に対して行うアンケートで、その結果をこのプロジェクト学習でのイカロボット 11 号機の知名度の最終結果とするので企画運営班は函館以外の観光客の方々に対してイベントを行うだけではなく、函館の方々を視野に入れたイベントを行っていくことで知名度を向上させていくことを目標に考えている。次年度への引継ぎに関しては、最後に引継ぎ内容をプロジェクトメンバー間でお互いに評価、さらに実際に次年度のプロジェクトメンバーに見てもらおうことで有用なものかどうか評価してもらおうと考えている。

(※文責：荒尾元紀)

3 章 チーム課題解決のプロセス

3.1 前期での活動

3.1.1 函館山

2017年度イカボプロジェクトとして初めてイカボの知名度向上のために企画運営したイベントは函館山イベントである。まず始めに函館山イベントを企画したのは、教授からの話の持ち込みがはじまりである。話としては教授が函館山ロープウェイ関係者からロープウェイでの待ち時間にイカボ 11 号を使って有効に使えないかと打診されたのがきっかけである。また、まず私たちは何をすれば函館山イベントにおいてイカボを最も見ってもらえるか運営班で考えました。その結論として観光客が最も多い函館山頂

上に設置するのが良いと考えた。またイカボ 1 1 号は前年の改良点として任意で手足や頭を動かせるようになったコントロール機能が追加されたため、イベントに来てもらった観光客に動かしてもらおうことが出来る様に設置した。それをメインに据えた上で函館山イベントは今年度の新たなイカボプロジェクトとしての初のイベントということもあり、基礎的なイベント運営へのノウハウを習得する意味でも様々な事に意欲的にチャレンジしようという結論になった。イベントに来てもらうには、まずイベントについて知ってもらう必要があると考えたためポケットティッシュを活用した宣伝を考えた。業務用のポケットティッシュに告知用の紙を封入し、その紙の表面にはちょっとしたイカボに関するクイズのような文を書き込み、裏面にはその答えが書いてあり、ポケットティッシュに興味を持ってもらい、受け取りとりやすくなり、またイカボに興味を持ちやすいように工夫を用いた。それらを 500 個程用意し、運営班で手分けして配布した。余ったポケットティッシュは他のイベントでも再利用できるため、これ以降のイベントでも入荷を繰り返しながらも配布した。その他の告知としてイベントの事前にポスターや SNS での函館山イベントでの告知をしました。SNS を利用した拡散的なイベントの告知も考えたが（イカボに関するツイートを投稿してくれた人を対象に、イカボグッズがあたるクジがひけるようにする）予算とイベントへの時間の都合上断念した。函館山イベントの内容としては、先述の通り来てくれた観光客にイカボを動かしてもらおうことに加えて前年度のイカボプロジェクトの引継ぎとしてのイカボグッズとイカボ紹介動画があったため展示、販売を行った。これらに加えてプロジェクトの一環としてアンケートを実施した。それらに加えてイカボに触れ合っていた方にアンケートを行い知名度や良かった点、悪かった点を収集し、次に繋がるようにした。また FM ラジオイルカにも出演しイカボプロジェクトの紹介を行った。イカボの制作過程やプロジェクトの意向を函館内で宣伝できたのは効果的だったと感じた。函館山イベントの結果としては函館山が一大観光地ということもあり多くの方々に来ていただくことができた。良かった点としては、大きなトラブルも無くイベントは進行し、アンケートの結果も概ね高評価だった点である。反省点としてはイカボを動かすタッチパネルの UI に改良の余地がある点と、イベントの企画、実施の判断に時間を割きすぎてしまい、イベントへの十分な準備時間が取れなかった点がある。また各班との情報共有や連携が拙かった部分があった事である。

(※文責:市口智幹)

3.1.2 港まつり

イカボプロジェクトでは函館市の新たな観光シンボルを製作し、函館市の活性化に繋げ、将来的には函館をロボット情報の集積、発信基地に育てるという理念のもとに活動している。イベント班での目標はイカボの知名度を前年度の 26%を上回るよう

にし、函館といえばイカボがあると思っていただけるように、イカボを函館で有名にしていくことだ。今年度、イベントへの参加やメディア活動によってイカボの知名度を上げることを目標に活動し、前年度の先輩方が11号機の基盤を作ってくれていたのでもっと知名度を上げるにはどうしたらよいかを考え続けた。最初の段階でイカボ11号機を8月の港まつりに持って行くのは決定していた。まずはそこに向けてのPR活動を含む知名度の上昇を目標にイベントを行なってきた。八月に行われた函館港祭りのイカ踊りのパレードではイカボ11号機と共にグッズ班の制作した着ぐるみが初めて出演し、いか踊りを踊って港祭りを盛り上げた。沿道では多くの人に声をかけていただいたため、今後のイベントでも着ぐるみを有効的に使いイカボの知名度貢献につなげていこうと考えた。

次にイカボ11号機について説明したいと思う。イカロボットは新たにイカ踊りの曲に合わせて腕を左右に動かし踊りだすという機能が追加された。制作班は函館をロボット情報の集積、発信基地に育てるという理念の元にみなとまつりの日までを目標に開発を進めてきてくれた。イカ踊りはArduinoというマイクロコンピュータとPLCという制御装置を使用して、IKABOの関節を一つ一つ動かしている。こうすることにより、IKABO1号機にはなかった、より自由に細かな動きが可能となった。この後の開発目標は音声機能である。IKABO11号機と動くこと以外で利用者とコミュニケーションを行うことができる機能が必要であると考え、この機能を搭載しようと考えた。IKABOとの限定的な会話を行う機能を開発したいと考えた。

またイカボの知名度は去年の先輩方の尽力により向上しているが、まだイカボを知らないという人は多い。その現状を変えるためには、イカボという存在を目にもらえる機会を増やすことが必要だと考え、着ぐるみの制作を企画した。着ぐるみはみなとまつりまでに名前やデザインなどを決め完成させることがグッズ班の目標だった。無事、その目標は達成することができた。パレードではイカボ11号機本体に加えて今季新たに作成した着ぐるみの反響が大きく港まつりを大きく盛り上げることができた。反省点としては当日プロジェクトメンバー間の連携が上手く取れておらず、着ぐるみを学校に忘れて来るといった事態が起きてしまった。結局タクシーで取りに帰り無駄な出費が発生してしまった。言葉足らずなメッセージ間のやりとりは非常に危険であると気づくことができた。この反省を踏まえて後期の活動はしっかりコミュニケーションを取っていたと思う。後期はスムーズにイベント企画が行うことができ例年よりも多くイベントを開催することができ、時間にもゆとりがあった。チーム間、メンバーの連携の重要性を再確認できた。

(※文責:岩田和記)

3.1.2 その他の活動

まず、イカボプロジェクトはイカボ1号機の見学から始まった。私達は函館駅の目の

前にあるキラリス函館未来館でイカボの操作手順や仕組みなどを学んだ。

5/19(金)NHK「ジューダイ」という番組に出演し、全国区でイカボプロジェクトとイカロボットを紹介した。番組「ジューダイ」では芸能人のヒヤダインさんとペえさんが実際にはこだて未来大学に来て私達にインタビューをしてくれた。インタビューの詳細はイカボとは何なのか、普段の学校生活、学校の勉強についてなど。短い時間であったが共に楽しい時間を過ごすことができたと思う。ちょうどプロジェクトが始まった時期だったのでイカボを今後どうしていきたいのか。目標の再確認やプロジェクトの目的をしっかりと考えるきっかけになった。この数週間後函館山でイベントを企画運営し、催すことが決まった。目標の再確認を行なったことでイベントの企画運営が円滑に進んだ。次に6/24(土)に函館山イベントとラジオ「FM いるか」に出演した。函館山イベントでは主に、イカボ11号機を実際に動かしてもらい感想を聞くことに加えてイカボグッズの紹介や、イカボティッシュの配布、イカボ紹介動画の放送などを行った。当日は600人以上の観光客と触れ合うことができ大盛り上がりだった。「FM いるか」ラジオの様子としてはDJとプロジェクトメンバー3人で話し合う。DJの質問に答えていく形で進められた。そこでイカボの紹介を行い函館山の観光客に対してイカボとは何のかを説明し、多くの方々にイカボを知ってもらうことができた。

次に高校の授業の一環として高校生に対しプロジェクトの発表(説明)をする機会があった。発表準備をしっかりと行い、イカボについて知ってもらう良い機会になった。完成したばかりの着ぐるみも披露することにした。この発表で初めて人と着ぐるみが触れ合った。やはり着ぐるみの力は大きく簡単に多くの人を引き込められた。着ぐるみに夢中になる生徒が多く発表どころではなかったが訪問者全員が喜んでくれた。着ぐるみの力でイカボの知名度向上を目指していきたい。

また新聞社の取材は定期的に行われていた。去年も取材はあったみたいだ。函館ではよく取り上げて頂いているようだ。しかし、「新聞に取り上げられている」と「知名度がある」は必ずしもイコールではないようだ。知名度は以外にも低かった。その他にもオープンキャンパスや大学説明会などもプロジェクトとして参加することになる。高校生や地域の人たちに発表する機会が非常に多かった。説明会は函館と札幌で行なわれた。

(※文責:岩田和記)

3.2 後期の活動

3.2.1 木古内道の駅

木古内イベント

イカボプロジェクト後期の活動でプロジェクトメンバーが話し合い、企画運営した初めてのイベントは木古内駅道の駅イベントである。まず初めに木古内駅の道の駅でのイベントを企画したのは、駅は屋根や自由スペースなどが設置されており、また様々な年代の人が来る事に加えて人の往来も激しいためイカボの知名度向上のためのイベントを

するのに適していると考えたからだ。よって、まえまえから駅でイベントを行うことについては話合っていて、その時の候補は新函館北斗駅だった。しかし距離や時間、アポイントメントの都合上木古内駅に変更になった。駅は様々な年代の人が来る事に加えて人の往来も激しいためイベントをするのに適していると考えたからだ。この時のイベントでは改良したイカボ11号機のデモンストレーションに加えて、イベントでは初めての使用となるイカボの着ぐるみを使用した。またこれまで同様にイカボグッズの紹介、イカボを紹介するムービーの放送、ポケットティッシュの配布を行った。また今回は新たに製作したイカボの塗り絵を行った。塗り絵に興味を持ってもらい小さなお子様でもイベントを楽しめる事ができると考えたからだ。そしてやってもらった塗り絵は持ち帰ってもらうことで2次の広報にもなると考えた。また特に今季新たに作製した着ぐるみは反響が大きく、イカボ11号機では手が届かない所にも活用できる点は大きかった。具体的にはイカボ11号機は基本的に設置するとい位置を動かす事が出来ないのだが、着ぐるみはイベント地周辺を容易に歩き回ることが出来、イベントの宣伝や客引きができた。また親子連れに写真を頼まれる事も多く、イカボプロジェクトの宣伝に貢献できた。また着ぐるみは特に小さな子供に評判が大きく、着ぐるみに興味を持ってもらってからイカボ11号機にも興味を抱いてもらう理想通りの動きが出来た。良かった点は、前期の経験や反省点を踏まえてスムーズに企画運営ができ、割り振りした仕事のグループごとの情報共有ができた点である。反省点としては木古内駅に対して下見が十分ではなく利用者数や年代、ダイヤに適したイベントの時間や内容の開催ができなかった点がある。また、悪い意味でイベントの企画運営に対し慣れができてしまったと感じた。加えて木古内駅でのイベントが室内なこともありイカボ11号機からの騒音により、動きが制限されてしまった。その場合の想定をしていなかったのも反省点として挙げられる。しかしこの様にイカボ11号機が満足に動けなくなった場合でも着ぐるみは活かせる点はよかった。

(※文責:市口智幹)

3.2.2 五稜郭タワーイベント

五稜郭タワーでのイベントを行う上で行った準備は、五稜郭タワーでのイベントの目的は主に外国人などの観光客をターゲットにする目的があったのでイカロボット11号機に興味を持ってもらうためには、どのように観光客の外国人にアピールをするかが重要になってくると考えた結果、英語や中国語などでの案内は満足にできないし、大きなイカロボット11号機を置いておくだけでは、ただ大きなロボットか何かが置かれているだけだと思われてわざわざ足を止めてまで見に来てくれる方は少ないと思い、特に家族連れの観光客にターゲットを絞って小さな子供が塗り絵に興味を持ってくれば必然と大人も付いてきてイカロボット11号機を近くで見たいという結論に至ったからである。よって小さい子供にも興味を持ってもらうために塗り絵を取り入れよう

としたのでどのようなデザインの塗り絵にするか、いくつの種類の塗り絵を準備するかなどを話し合ったりした。

五稜郭タワーでのイベントの当日は、朝の 10 時から午後 3 時までのイベントを行った。イベント当日の五稜郭タワーは予想をしていた通りにほとんどすべてのお客さんが外国人の観光客の方々だった。イカロボット 11 号機を実際に動かして、今年度に作成をしたイカロボット 11 号機の着ぐるみを着て観光客の方々にイカロボット 11 号機をアピールしていたが、平日ということもあって観光客の人数が予想を大きく下回るぐらいの人数しかいなかったの、多くの方々にイカロボット 11 号機に興味を持ってもらえたかとはいうことが出来ない結果に終わった。しかし、イベントの準備の際に考えていた塗り絵で小さい子供を集客していこうという計画は予想通りにうまくいった。最初は小さい子供が着ぐるみに興味を持って近くによって来てくれて、その後、塗り絵にも興味を持ってもらえたのでその子供達の両親などもイカロボット 11 号機の傍まで来てくれてほんの少しかもしれないがイカロボット 11 号機に興味を持って来て実際に操作をして楽しんでくれたと思う。

今回行った五稜郭タワーでのイベントの反省点は五稜郭タワーに来る観光客の大まかな人数を見誤ってしまったことであり、平日でも大勢の観光客で賑わっていると想定してしまったので当初の計画通りにイベントを盛り上げていくことが出来なかったことである。しかし、一番大きな理由は、塗り絵や着ぐるみだけで集客をしようとしていたことが間違いであって、もう少し違う案を出すことが出来なかったということが反省していくべきことだと思う。

(※文責：荒尾元紀)

4 章 中間発表会・成果発表会での評価

4.1 中間発表会の評価

4.1.1 集計

発表内容の平均点は 6.2 点であった。

発表技術の平均点は 6.5 点であった。

(※評価シート 44 枚分での集計結果である。)

(※文責：井本隆太)

4.1.2 解析

発表内容では自分たちがやろうとしていることの目的やイベントの概要などをしっ

Planning and Management team

かりとまとめられていたと思うが、発表準備の時間調整をうまくすることができなく準備不足があったために質問にうまく答えられなかったりした点が6.2点という結果になったと考える。評価コメントとしては「スライドとのつながりが少しわかりにくい」や「説明が不足している部分がありわかりにくい」など批評が見られた。発表技術では発表内容と同様に準備不足によりスライドが簡易的になってしまったことや、班員とのコミュニケーション不足で役割分担が的確にできなかったことで聞いている人にうまく伝わらなかった点があったためにこの点数になってしまったと考える。実際に、「スライドが見にくく、もう少し工夫がほしい」や「ポスターをもう少しわかりやすく作ったほうがいい」などのコメントが多くみられた。

(※文責:井本隆太)

4.1.3 検討

企画運営班としてはイベントの時に IKABO11 号機を動かす体験会だけでなく少し工夫を試みたほうが良いという意見が多くみられた。そこで後期の改善点としては前期のイベントで行っていた IKABO11 号機の体験会に合わせ、他の方法で IKABO の知名度を上げる方法を検討していきたいと考える。

(※文責:井本隆太)

1.4 評価

以上のことを踏まえて、私たちの中間発表の評価は5点としたいと考える。理由としてはイベント準備などに時間を取られてしまい、発表の準備期間が不足していたことにあると考える。発表当日もポスターや発表場所の作成に時間を取られてゆとりのある発表ができなかったと考える。これによりスライドの見やすさや発表自体のわかりやすさが欠けていたと考え5点とする。後期ではイベント準備と発表準備を計画的に行いスライド準備などしっかりと行うことを目標に活動を行う。

(※文責:井本隆太)

2 成果発表会の評価

2.1 集計

発表内容の平均点は6.8点であった。

発表技術の平均点は7.1点であった。

(※評価シート47枚分での集計結果である)

(※文責:井本隆太)

2.2 解析

発表内容、発表技術ともに前期より上がるという結果になった。このことから前期よ

りも計画的に行動できたと考えられる。

発表内容については、前期の反省を踏まえて班員の中で最初にイベントごとに担当を作り担当者でイベントを行うというやり方をすることにより効率よく多くのイベントができ、発表準備もイベントごとに作ることができるのでその結果が出たのではないかと考えられる。評価コメントも「説明がわかりやすい」や「成果をしっかりと話しているよかった」などの意見が多くみられた。

発表技術については、スライドや文章など担当をあらかじめ決め、効率よく作業分担し、しっかりと話し合いを行うことができた結果が出たと考えられる。評価のコメントでも「スライドがすっきりしていて見やすい」、「写真が多く見やすかった」というコメントが多くみられた。しかし、「声が小さい」や「ジェスチャーが欲しい」などの批評が見られた。

(※文責:井本隆太)

2.3 検討

今年度はIKABO11号機というものに親しみを持って多くの人に知ってもらうのを目標としていて、着ぐるみを作成しようと話し合いをしていた。グッズ班が着ぐるみを作成して、後期から使えるようになったことで前期よりも気軽にイベントを行うことができるようになり、短い期間の中で多くのイベントを行うことができた。来年度は着ぐるみも活用しながらより多くのイベントを行い、知名度を上げる方法を検討する。

(※文責:井本隆太)

2.4 評価

以上のことを踏まえて、成果発表の評価は7点としたいと考える。理由としては、中間発表の反省点を踏まえて準備期間を十分に取ることができ、スライドやポスター、発表原稿などの作成時間を確保でき完成度が上がったことにより評価も上げることができた。しかし、自分たちの能力不足や確認不足などにより発表内容などに多少の批評があったので自己評価としては7点をつけた。

(※文責:井本隆太)

5章 個人課題解決のプロセス

5.1 市口智幹

5.1.1 プロジェクト内における位置づけ

企画運営班所属。広報担当兼後期プロジェクトリーダーを担当し会議の進行、出席管理を仕事にした。具体的にはホワイトボードに会議をまとめ、それぞれに仕事を割り振

り、出席遅刻を管理した。広報活動としては SNS でイカボのアカウントを引継ぎ、イベントの告知を行った。運営する企画のコンセプトの決定。それに即したまとめを行った。まず、企画するイベントのイメージを想像に、メインターゲットや時間、予算との兼ね合いを運営班と話合った。その後、下準備を重ね、時間場所を決定。製作班と情報を共有しイベントがスムーズに進むように画策した。

(※文責:市口智幹)

5.1.2 課題の概要

年代や性別、出身に関わらずイカボについて知ってもらうために、よりよいイベントの企画運営を行うことを課題とした。引継ぎだけでなく今年度のプロジェクトとして新しい事を進める必要があった。トライアンドエラーではありながらも新たな取り組みは今までなかったことであったため、プロジェクトリーダーとしては企画運営に対しての方針付けが一番の課題となった。自分はこれに付随して、各班との情報共有を行いスムーズに進める様にした。各班、活動が違う時があり、また班が違うからみたいな意識があったのをどのように改善するかが担当の課題となった。具体的には自分なるべく前に立ち意見を出すようにしたまた各班ラインなどのツールではなく、実際に会って話し合うことを意識した。あまり企画運営の経験がなく、ノウハウを得るのも課題となった。

(※文責:市口智幹)

5.1.3 担当課題解決過程の詳細

まず企画運営の進行の際、イカボについての知識不足つまりイカボで何ができるのか、何をすればイベントに来てくれた人が楽しんでくれるのかを考える必要があった。まず、最初に行ったのはイカボの知名度調査及びまず案ずるより産むがやすしで企画運営を経験してみることであった。今年度は 前年度からの引継ぎである 11 号機があるのもあり、引き継いだイカボが何をできるのか調べた。またプロジェクト初回ではそもそものイカボの函館未来館に行きイカボのコンセプトについて学び、またイカボの機能面についての知識を得ることができた。この段階ではイカボ 11 号機がどのように動かすことができるかわからない状態、またイカボが提供者に対してどのような反響があるか調べた、そのあとイカボをどのように動かすか運営班で話し合った。また、前年度からの引継ぎであるイカボの動画は、イカボプロジェクトの歴史を踏まえ、その中でイカボ初号機はどのようにして誕生したのかというものであった。新たにイカボに関する紹介の動画を作成するか話し合ったが、既存のものの出来がよかったがあるので、新しいコンテンツ作成に時間を割いた方が良く判断した。現状では引継ぎのイカボというコンテンツと新たに作製するコンテンツで何ができるかわからなかった。まず初めに企画すべき時間があまり無かったので、まずイカボプロジェクトの前年度の先輩に聞きながらひとまず企画運営をしてみることにした。またこの企画することで企画運営のノウハウ

Planning and Management team

を学ぶことにした。そのためにまずイカボプロジェクトがどのようなイベントを実施したか調べた。場所や実施内容、反響、そもそものイカボの集客力や知名度を調査する必要があった。ひとまずイカボプロジェクトの知名度調査するためのアンケートを作成する必要があった。それらはグッズ班に一任した部分もある、継続的に使用していくアンケートではあるが微調整を繰り返した。それは結果として良かったのか判断は難しい。なるべくいいものにしようという姿勢は評価できる。また今年度の初回イカボプロジェクトのイベントである函館山イベントでは函館山の人々がイベントにとっても協力的だったのもかなり助けられた。まず函館山でイベントを開催することが決定した段階で、下見を実行した、函館山はプライベートで何回か来た事があったが、イベントを運営するという視点でみると普段と違うものが見えた。イベントを企画運営するに際し下見の重要性がわかった。そしてたくさんの協力を得ながらも函館山イベントを実施した。特に大きなミスもなく無事に終了した。ここまでが前期の活動である。反省点としては余分な所に時間を割きすぎた部分があることである。後期の活動としてはイカボプロジェクト恒例の港まつりの参加、ここで新しく制作した着ぐるみのお披露目であった。次に木古内駅でのイベントの実施、想定外のことも多くあったが概ねうまくいったと思う。

(※文責:市口智幹)

5.1.4 担当課題と他の課題の連携内容

イベントを企画運営するにあたりイカボの性能の向上とイベントでイカボが出来る行動の幅は比例関係にあるので企画運営班と制作班が情報共有をしっかりと行うことが課題であった。

(※文責:市口智幹)

5.1.5 担当課題の評価

自分の課題はどうすればスムーズに企画運営を行えるかが課題であった。六人態勢でのイベントの企画運営、実施判断、開催地の関係者とのアポイントメントを実施、後期はプロジェクトリーダーとして意見を率先して出した。具体的にはホワイトボードに会議をまとめ、それぞれに仕事を割り振り、出席遅刻を管理した。

(※文責:市口智幹)

5.2 岩田 和記

5.2.1 はじめに

なぜいくつもあるプロジェクトからイカボプロジェクトを選んだのか。私は大学三年生になり将来どうなっていきたいのか考えた。公務員志望というのが強く影響した。公務員は地域の住民の為に働くのでロボットで地域貢献をテーマとするイカボプロジェ

クトはとても魅力的であった。地域住民との交流、イカボの PR に興味がわいた。

(※文責:岩田和記)

5.2.2 活動の目標設定

目標設定が一番難しく感じられた。イカボで何がしたいのかイカボとは何なのか、どう PR していくのか、イベントはいつやるのか、決めることは山ほどあるがイカボの知識が全くないので何も決める事が出来なかった。まずは目標をしっかり固めないと何も進まない。そのまま良いアイデアが出ずモヤモヤした期間が長かった。ある日、NHK の番組「ジューダイ」でヒヤダインさんとペえさんが取材に来てインタビューを受けた。この番組は 10 代が主役・発掘ロケ番組だ。私たちは 10 代でなかったがなぜか取材のお願いがきた。当然知識がないのでインタビューされても上手く答えられなかった。これが今後イカボについて考える良いきっかけになったと思う。

(※文責:岩田和記)

5.2.3 前期の活動

前期の活動を通してチームの連携、メンバー間の連携の重要さに気づいた。私はリーダーに割り振られた仕事だけをやっていったが、誰にも割り振られなかった新しいタスクは当然だれもやらない。そのタスクは中間発表や最終発表直前になって表われてくる。どの仕事はどれだけ進んでいるのか。個人個人、割り振られた仕事はきっちりやっているのか。手をつけていない仕事に対して知らないフリをするのではなく、チームで活動しているので他人の状況も気遣う必要があったのではないかと少し思う節がある。何か気づいた時にはすぐに共有してみんなで考えた方が仕事は進むと感じた。仕事以外のメンバー間のコミュニケーション、グループの雰囲気は良く楽しく活動できた。初めて話す人も多かったが問題なく仲良くなる事ができた。仲良くなるという事はチームで活動する上で大切な事だと思う。私は函館山イベントの企画運営を行い、函館山の下見や係りの人と詳細を決めるなどイベント準備の仕事も行なった。イカボ 11 号機はとても大きく設置場所を考える必要がある為下見は必須であった。下見を実際にする事でイベント当日の状況がイメージしやすくイベントの詳細を決める事ができる。係りの人との交流で新たな発見があり、知らない事をたくさん知る事が出来た。函館の住民、函館山の観光客を楽しませたいと考えている事は同じ。「楽しませる側」としての活動はとても楽しく感じた。イベント当日はイカボとの触れ合いを提供しティッシュを配って広報活動を行なった。ティッシュには広告カードが入っておりイカボの説明を記載した。イカボの twitter アカウントの ID も記載したがフォロワーはまったく増えなかった。また、函館山の観光客は思っていたよりも外国人が多くとても苦労したがこんなロボットがいるのだぞというのは十分アピール出来たのではないかと思います。まだまだ PR 活動が足りていないと感じた。

次に中間発表で行ったことについて説明する。発表資料作り。特にポスター制作に時間がかかった。イカボプロジェクトのメンバーは複雑系コースと知能システムコースの生徒のみで構成されていたからだ。自分の出来ない分野はみんなやりたくないのポスター制作を避けていた。どうせ誰もやらないだろうと思い私と他のメンバー2人でメインポスター、企画運営班のポスターを制作した。ポスターの作成ソフトの使い方が全くわからず進まなかったが検索しながらも何とかやり終えた。この発表準備の役割分担は事前にしっかり決められていたが作業に遅れがでている人が多く、計画通りに上手くいかなかった。

(※文責:岩田和記)

5.2.4 後期の活動

最終発表の準備では、後期は前期の反省を踏まえてチームの連携を意識して作業を進めた結果、イベントの企画をして運営をスムーズに進める事が出来た。後期の発表準備の役割分担は事前にしっかり決められていたが作業に遅れがでている人が多く、計画通りに上手くいかなかった。反省点としては、みなと祭り当日、プロジェクトメンバー間の連携が上手く取れておらず、着ぐるみを学校に忘れて来るといった事態が起きてしまった。結局タクシーで取りに帰り無駄な出費が発生してしまった。言葉足らずなメッセージ間のやりとりは非常に危険であると気づくことができた。担当教授がめずらし怒っていたので二度とこのようなミスをしてはいけないと再発防止の為チームでしっかりと話し合う事にした。この反省を踏まえて後期の活動はしっかりコミュニケーションを取る事にした。後期はスムーズにイベント企画が行うことができ例年よりも多くイベントを開催することができ、時間にもゆとりがあった。チーム間、メンバーの連携の重要性を再確認できた。しっかりとコミュニケーションが取れていないと重大なミスを引き起してしまう。これは今後も役に立つ経験となった。

(※文責:岩田和記)

5.2.5 まとめと今後の課題

課題解決のためにプロジェクト全体、イベント班、個人活動の作業を行なった。プロジェクト全体において、イベント企画運営では積極的に意見交換を行う事が出来た。状況の整理、他チームとの情報共有をしっかりと行なった。イベントの企画会議ではメンバー同士意見を言い合い、積極的に参加する事が出来た。決めごとスムーズに決まりより良いイベントの企画へと繋げることができのではないかと思う。また、アイデアが出ずに先に進まない時には全体会議に話を持っていきみんなで考えることができた。別の班からの視点で考えてもらう事はとても大切だと感じた。他の班の作業が進んでいないときは作業を手伝ったりした。作業として着ぐるみのデザイン、ポスターデザインなどを一緒に考えた。イベント班においては、現状の把握と整理を行ない、他の班との

連携や解決しないといけない問題を再確認し、作業を達成できるようにした。そこでグループメンバーとの情報の共有、仕事分担を行なう事で作業を達成していくことができた。今後の課題としては着ぐるみを作成したのでそれをどう活用していくのか。イカロボットとどうコラボしてどうイカボをPRしていくのか。全体の状況把握を行なうことから作業を行なうことにより効率的にやるべき作業を行なっていけると考える。こうする事で多くの課題解決へとつなげていくことが可能である。 (※文責:岩田和記)

5.2.6 プロジェクトの成果として得られた事

イカボプロジェクトは10代の学生を中心にイカボの知名度アンケート調査を行なった。アンケート結果としては、イカボ11号機を知っているという人は全体の9%ほどでNHK番組「ジューダイ」を見て知ってくれたという人が意外にも多くいた。また、グッズは幅広くトートバッグとブランケットが特に人気があった。イカボの操作性に関しては操作しやすかったという人と操作しづらかった人がほぼ半数ほどいた。操作してみて楽しかったという人が全体の60%ほどいたのでタッチパネルの操作性が今後の課題だと感じた。初イベントということで反省点や改良すべきところなどが明確になった。後期はアンケートを元にイベント内容を変えていった。イカボと触れ合う事中心に多くの方が喜んでくれるようなイベント作りを意識して考え続けた。アンケートを参考に今後のイベントを考えていく事でより良いイベントを企画運営する事ができる。

(※文責:岩田和記)

5.3 岩田和樹

5.3.1 プロジェクト内における位置づけ

前期後期ともに企画運営班に所属。一年を通してイベントに関する様々な話し合いに参加し、意見の提出、まとめを担当した。イベントではほかにも、五陵郭イベント以外のすべてのイベントに参加し企画提案書・企画書の作成、イベントの準備、外部の方との連絡、イベント当日に使用するアンケートの作成などを担当した。また前期はテレビ、新聞、ラジオの取材を全て担当し、IKABOの広報活動を行った。加えて、前期はプロジェクトリーダーとして各班の連携役も担当した。

(※文責:岩田和樹)

5.3.2 課題の概要

昨年度の本プロジェクトからの引継ぎから、IKABOプロジェクトは長年続いてきたプロジェクトにもかかわらず、過去のデータがほとんどない状態だということが分かった。そのため、過去のデータの反省を踏まえたイベントや、過去つながりのあった外部の企業や地域の方々がほとんどわからないという問題があった。そこで自分の課題として、現在の状態からいかにたくさんのイベントを企画し、盛り上げることができるかと

いうこと。プロジェクトリーダーとして、プロジェクト全体をより良い組織へとまとめ上げていくということとする。

(※文責:岩田和樹)

5.3.3 担当課題解決過程の詳細

今年の IKABO プロジェクトの初めは昨年度の先輩たちからの引継ぎだった。その引継ぎの際、IKABO プロジェクトは長年続いてきたプロジェクトにもかかわらず過去データが昨年度の分しかないことが分かった。そこで自分はプロジェクトリーダーとして昨年度のプロジェクトリーダーや担当教員に今までどのようなことを行ってきたのかということ、そこでどのような課題が生まれてどのように解決していったのか詳細に聞くことから始めた。そこで、IKABO11 号機の運搬にプロジェクト費用がかなりかかってしまうため、イベントをたくさん行うというのは難しかったことが分かった。プロジェクト費用は限られているため、どうすれば IKABO 本体を使わずに IKABO の知名度を向上させることが出来るかプロジェクト内で話し合った結果、IKABO11 号機をモチーフにした着ぐるみを作成するという案が出た。着ぐるみを作成すれば運搬費用がかからないため、今までとは比にならない数のイベント活動が行えることから着ぐるみを作成することが決まった。着ぐるみ作成に関する詳細はグッズ班に任せることになったが作成期間が長く、前期のうちは間に合わないことが分かった。そこで、企画運営班として前期は IKABO11 号機を実際に使った最低限の数のイベントを行い、あとは広報活動に力を入れようということになった。IKABO は長年続いてきたプロジェクトであるためか、メディア側から取材の依頼が来るなどしたため広報活動はスムーズに行うことが出来た。広報活動の詳細な中身としては、NHK「ジューダイ」、北海道新聞、函館新聞、函館の FM ラジオ「イルカ」の取材を受けることが出来た。自分は全てに参加し、連絡係やプロジェクトリーダーとして積極的に取材に答えるなどした。IKABO11 号機を実際に用いたイベントとしては「函館山イベント」、「港まつり」を行った。イベント会場として函館山を選んだ理由としては、まずたくさんの人が集まるということ、次に函館の人だけでなく全国各地様々な場所から観光客が訪れるということから企画運営班での話し合いの結果函館山に決定した。函館山イベントでの自分の役割は、函館山の関係者との連絡、イベントの前に函館山を下見し、担当者との打ち合わせ、イベントで配布予定の IKABO がデザインされたティッシュの発注と作成、会場の設営と撤去、当日のイベント活動である。イベント当日は念入りな打ち合わせもあつてか非常にスムーズに進めることが出来、盛り上げることが出来た。港まつりに関しては年々 IKABO プロジェクトが参加している行事であるため、担当者との連絡などのアポ取りはほとんどなかったため、企画運営班としての活動は当日以外あまりなかった。なので自分はプロジェクトリーダーとして、IKABO11 号機の安全性のチェックから着ぐるみの準備などグッズ班や制作班と連携し、活動した。当日は連絡が全員に行き渡っておらず、着ぐるみの

到着が多少遅れるというハプニングがあったものの、イベント自体は順調に行うことが出来た。7月には中間発表が行われたが、イベントの話し合いや準備に時間をかけすぎてしまいイベントの予定が中間発表間際になってしまった。そのため中間発表に向けて十分な時間が取れなかった。結果的にポスターやスライドの出来が自分の納得できるものにならなかったため、反省するべき点であると思う。前期はプロジェクトリーダーとして、手探りながらもなんとか各班と連携をとりながらイベントを進めることが出来たと思う。しかし見通しの甘さから、期限ギリギリの作業が続いてしまったことは反省点として挙げられる。以上からプロジェクト全体をより良い組織へとまとめ上げるという課題解決に関しては概ね達成できたといえる。ここまでの前期の担当課題解決過程の詳細である。後期からはプロジェクトリーダーが自分から、ほかの有志のプロジェクトメンバーに代わったため、これ以降は企画運営班としての課題解決の詳細とする。企画運営班の話し合いで、後期はIKABOの着ぐるみが完成したため、前期より多くの企画を運営していこうということになり話し合いの結果、IKABO11号機本体を用いた大きなイベントを2つとIKABOの着ぐるみを使用した広報活動をできるだけやっけていくことに決定した。大きなイベントとしては「木古内道の駅イベント」、「五稜郭タワーイベント」の2つを行えることになった。場所を決めた理由としては、前期同様に函館の人だけでなく、観光客の方々も集まる場所であることに加えて担当教員の推薦もあって決定した。ここで相手方と打ち合わせをする中で、どうしても2つのイベントの実施日が近くなってしまうということで企画運営班を2つに分けて別々にイベントの準備を進めた。自分は木古内道の駅イベントに配属され企画書の作成、イベントの準備、会場設営、イベント当日の活動を行った。企画書を作成する際前期と全く同じイベント内容では前回より盛り上げることはできないと思い、新たな企画を作った。それがIKABO塗り絵コーナーの設置である。IKABO11号機を実際に触り、興味を持ってくれる人の割合で子供の割合が一番多かったため、家族連れの方々を対象に企画を作った。イベント当日は予想通り、家族連れの方々が多かったため非常に反響が大きく、さらにIKABOに興味を持ってもらうきっかけになったと感じた。もう片方の五稜郭タワーイベントの方も海外からの観光客など函館以外の人たちが多くイベントに参加してくれて、多くの人たちにIKABOというものを知ってもらえることが出来た。IKABO11号機を使わず着ぐるみを主に使った広報活動としては、未来大主催の様々なイベントに着ぐるみを貸し出すことによってはこたて未来大学とIKABOの両方に興味を持ってもらうきっかけになったと感じた。後期は様々な場所でIKABOの着ぐるみを披露することができ、反響はかなり大きかった。限られた予算の中で、よりたくさんIKABOについて知ってもらえる機会を作るという課題解決において大きな役割を果たしてくれたと感じた。最後に最終発表だが、自分は発表の原稿を主に担当した。発表者の覚える時間を十分にとるためかなり早い段階から取り掛かった。最終発表を全体的に振り返ると、ほぼすべての作業が締め切り間際になってしまっていた中間発表と比べるとスライドやポスターなどどれ

をとっても満足のものになったと思う。アンケートの結果を集計し、しっかり全体で振り返ることで出た今年の IKABO プロジェクトの良かった点、悪かった点をこれから来年度に引き継ぐところまでが IKABO プロジェクトをより良い組織へと導いていくのに必要なことだと思うため最後まで課題解決のための自分の役割を果たしていきたい。

(※文責:岩田和樹)

5.3.4 担当課題とほかの課題の連携内容

プロジェクトリーダーとして全体をまとめ上げる上で各班の課題を把握するというのは必要なことであった。そのため、同じ企画運営班のメンバーの課題だけでなく、制作班、グッズ班のメンバーの課題解決に尽力することが自分の課題解決につながった。

(※文責:岩田和樹)

5.3.5 担当課題の評価

本プロジェクト活動において自分の課題となったのは、まず企画運営班として過去資料やデータが乏しい中で、いかにたくさんの盛り上がるイベントを運営企画し、IKABO の知名度を上げ興味を持ってもらうかということ。次にプロジェクトリーダーとして各班の連携役としてプロジェクト全体をより良い組織へとまとめるということの 2 つである。一つ目の課題に関しては、IKABO の着ぐるみを作成したこともあり、例年よりもイベントの数は大幅に増やすことが出来た。しかし、イベントをたくさん企画運営する中で、どうしても期限ギリギリでの作業が続いてしまったため一つ一つのイベントをしっかり反省し、次のイベントに生かすために話し合う時間というものがほとんどとれなかった。そのためイベントの質を改善していくことができず、同じようなイベント内容になってしまった点は反省点として挙げられる。それでもすべてのイベントでたくさんの方々と触れ合うことが出来、常に一定以上の盛り上がりは肌で感じる事が出来たため、課題は概ね達成できたといえる。次に二つ目の課題に関しては、後期からプロジェクトリーダーが変更になったため前期のみの課題評価とする。プロジェクトリーダーとして各班の連携役としてプロジェクト全体をより良い組織へとまとめるという課題だが、自分の中でよりよい組織というのはメンバー全員が話し合いに参加し、一丸となって取り組む組織である。そこで、自分は全員での話し合いの場を数多く設けて、積極的に意見を交わそうと試みた。なかなか意見が出ないときは自分から何らかの提案を出すこともあった。本プロジェクトは制作班、グッズ班、企画運営班の 3 つに分かれているがプロジェクト全体での話し合いだったため各班の進捗状況や課題の確認などが全員で共有することが出来、スムーズにプロジェクト全体が進んでいくことが出来たと思う。しかし全員での話し合いには多少なりとも時間がかかってしまうため話し合いに時

間を割きすぎて実際の活動時間が制限されてしまうという反省点もあった。ここが改善することが出来れば、自分の思い描くよりよい組織に近づいたのではと感じる。総括すると課題2つとも概ね達成することが出来たといえると思う。反省点に関しては来年度の本プロジェクトに引き継いでいかなければと思う。

(※文責:岩田和樹)

5.4 佐藤一輝

5.4.1 プロジェクト内における位置づけ

前期では企画運営班のグループリーダーとして企画運営班のタスクの提示、振り分けを行い、企画運営班の仕事がスムーズに進むように努めた。また、プロジェクトリーダーや制作班、グッズ班と連携をとりイベントを行う際に他の班との進行状況やイベントで実行可能なことを把握しタスクを進めていった。後期ではグループリーダーは降りたが企画運営班として新しいイベントを提案や実行するなど一年を通じて企画運営班として仕事を全うした。

(※文責:佐藤一輝)

5.4.2 課題の概要

プロジェクト全体の目標であるイカボの知名度を上げるということを課題にイベントなどを進めていきそのために多くの人にイカボを知ってもらうためにイベントでの工夫できることを考えた。多くの人に知ってもらうためにはイベントの回数などを多くすることで多くの人に目にしてもらうことが重要だと考えた。そこで、グッズ班などと相談して着ぐるみを作る策を挙げた。着ぐるみを作ることによってイカボ本体の運搬にかかるコストの削減ができて、より多くのイベントができると思った。他には着ぐるみを作ることによって子供などをターゲットに集客率を上げる狙いもあった。また、イベントを行う際に SNS などでイベントの告知やティッシュ配りをするこでのイカボの PR と同時にイベントの告知をすることなどを重点に多くの人にイカボのことを実際に目にしてもらい手で触れてもらうことを第一に考えた。そして、従来のイベントの他に函館山イベントや木古内イベントや五稜郭イベントなどの今年から始めたイベントにチャレンジしていった課題を見つけようとした。

(※文責:佐藤一輝)

5.4.3 課題解決の過程

プロジェクトの目標であるイカボの知名度を上げるという課題を解決するために様々なことに目を向けて着手した。そこで私たちは多くのイベントを開催することによってより多くの人にイカボを知ってもらうような取り組みを行った。そのためには、まずイカボのことを知って私たちがイカボの何を伝えてどこを推していきたいのかを知る必要があった。まず初めに行ったこととして過去のイカボプロジェクトの取り組みやイカボの歴史や過去の先輩が作ってきたものまでを調べた。また、イカボの一号機などを実際に見に行き動かし方や歴史などを学んだ。それらを踏まえて以下にイベントごと

の課題解決の過程を述べていく。

・函館山イベント

まず前期の初めに函館山イベントを行った。このイベントでは各地から集まる観光客をターゲットにイベントを進めていった。イベントの詳細を決める前に函館山に来る人がどの曜日にきて、どの時間帯に集まりやすいかを調べた。その結果、週末の夜が最も集客率がいいことが分かった。よって、土曜日の昼から夜にかけてイベントを行うことにした。次に、イベントの内容を考えた。函館山には多くの観光客が集まるのでできるだけ目立つところにイカボを置くことにし、場所は展望テラスの下に決まった。そこで、グッズ班と制作班と相談をしてどのようなイベントにしていくか案を出し合いイベント内容を決めていった。イベントを行う際の準備としてティッシュを配る際に必要となるデザインを考えた。デザインとしては、見やすく小学生などの小さな人でも分かるような分かりやすいデザインに仕上げた。また、イベントに参加してもらった人にアンケートを書いてもらうためのアンケートも作った。アンケートの内容としては函館近郊のご当地キャラクターなどを中心にイカボとの認知度の比較するためのものとイカボグッズでほしいと思うもの、イカボを動かしてもらったの感想や改善点などを書いてもらうもので、今後の活動の参考になるものを作成した。イベント内容としてはイカボの周りにポスターなどを置いてイカボの説明などをして、実際にイカボを動かしてもらう体験会を行った。他には、イカボの説明書きが書いてあるティッシュなどを配りイカボのことをPRするほか、それと同時にイカボイベントの告知も行った。また、イカボグッズの紹介やアンケートも書いてもらった。当日の自分の役割としては、最初はティッシュ配りを行ってイカボのイベントを告知し、同時に集客を行った。そのあとは、イカボイベントに参加してくれた観光客にポスターなどを見せながら説明したり質問に答えたり、イカボの動かし方を教えたりした。イベント当日には、多くの観光客が集まり足を止めてみてくれた方や実際にイベントに参加してもらうことができ、多くの人にイカボのことを知ってもらえたといえる。

・函館港祭り

8月3日の函館港祭りに未来大学として参加した。函館港祭りには毎年参加しており、港祭りの日にいか踊りを踊って盛り上げるものに本年度も参加することになった。函館山のイベントが終わった後にグッズ班と協力してイカボの着ぐるみを作成することにした。理由としてはイカボの着ぐるみを作成することによって多くの利点生まれ、イカボをイベント場所に運搬するためのコストを削減でき、イカボの着ぐるみだけでイベントもできる利点があるからだ。そして、港祭りの日までに完成し、イカボの着ぐるみが使われた初めてのイベントとなった。港祭りの当日には多くの観覧者がおりとても多くの人にイカボとイカボの着ぐるみが踊っているところを見てもらえた。また、NCVにもイカボが出ておりテレビを見ている人にもイカボのことを認知してもらうことがで

きた。

・五稜郭イベント

五稜郭イベントでは全国の観光客や海外の観光客をターゲットにイベントを考えた。五稜郭で多くの人が集まるところを上げたところ五稜郭タワーが最適だと考えたのでイベント場所は五稜郭タワーに決定した。五稜郭イベントを行う際の準備としてまずイベントで使う塗り絵のデザインを考えた。また、イベントに参加してもらう人を書いてもらうアンケートを作成した。アンケートの内容としてはイカボを操作してみても感想や今後や来年に繋がるようにプロジェクトに参考になるものを作った。イベントの内容としては五稜郭タワーの建物の中にイカボとイカボの着ぐるみを置き、イカボの操作体験会や塗り絵体験会、アンケートの協力などをしてもらった。イベント当日では我々の予想通りで全国各地の観光客や海外の観光客が多く集まりイカボのことを初めて知ったという人がほとんどであった。イベントに参加してもらった人には、イカボの説明をしたりイカボの操作の仕方を教えたりして多くの人にイカボを知ってもらえた。また、子供連れの観光客も多く塗り絵も多く書いてもらって子供やその親御さんにもイカボのことをPRできた。足を止めてくれた人の多くはイカボをとっても興味をもってくれてアンケート結果からもイベントを楽しんでもらったという人が多くいた。イカボの着ぐるみは観光客がととても珍しがっていて足を止めて写真を撮ってくれ、集客にもつながったので着ぐるみを作っていい効果が得られた。

(※文責:佐藤一輝)

5.5 荒尾元紀

5.5.1 プロジェクト学習の最終目標の設定や計画

プロジェクト学習を進めていく上で必要になってくるのは、プロジェクト学習の最終目標の設定とその最終目標を達成するために1年間のプロジェクト学習で行っていく内容の大まかな計画を設定していく必要があると考えたのでその内容の設定を行った。まず、プロジェクト学習の最終目標は、前年度のイカロボット11号機の知名度の35%から50%へあげるということを最終目標に設定した。50%に設定した理由は、まず、前年度の知名度を上回ることは必要最低限であり、尚且つ1年間で知名度を60%や70%まで大幅に上げることは現実的に考えて難しいという結論に至ったので50%という数字に設定をした。

次に、設定した最終目標を達成するために1年間プロジェクト学習でどのようなことを行っていくかを考えて計画をしたのだがイカロボット11号機の知名度調査のアンケートは主にイベントの時に行うアンケートや、函館の複数の高校の生徒に対して行い、その結果を最終結果とするので函館以外の観光客の方々に対してイベントを行うだけでなく、函館の方々を視野に入れたイベントを行っていくことで知名度を向上させて

いく必要があると考えている。さらに、中高生などの若者に対しても知名度を上げていく必要もあるので中高生には Twitter などの SNS などで行っていくイベントの内容やイカロボット 11 号機の情報発信することでイカロボット 11 号機の知名度を少しでも上がるようにしようと計画した。

(※文責:荒尾元紀)

5.5.2 実際の 1 年間の活動内容

プロジェクト学習での実際の活動内容は、まず、イカロボット 11 号機の知名度を上げていくためにどのようなことをしていけばいいのかを考えた結果、函館の色々なところでイカロボット 11 号機を知ってもらうためのイベントを行っていくという考えにまとまった。そして、次にそのイベントをどのような場所で行っていくか、また、何をして集客をするかを考えた。

その結果、まず、イベントを行っていく場所は観光客をターゲットにする場合は、函館山や五稜郭タワーなどの観光名所でイベントを行い、地元の函館市民をターゲットにしていく場合は、港まつりでのイベント行うとした。

そして、一番初めに行ったイベントは、観光客をターゲットにした函館山で行った。函館山でのイベントは、イカロボット 11 号機をイベントに来てくれた方々に実際に操作をしてもらうこと、また、イカロボット 11 号機に関するアンケートを行った。さらに、少しでもイベントに興味を持ってもらうためにイカロボット 11 号機のイラストをプリントしたものを作成し、その作成したプリントを入れたティッシュを函館山にいる方々に配ることでイベントの宣伝活動なども行った。そしてそのイベントが終わった後は、答えてもらったアンケートの集計やイベントの反省などを行った。イベントの反省の具体的な内容は、イベントを通りがてら見てくれる方はたくさんいたが、実際に足を止めてイカロボット 11 号機を操作して頂いたり、アンケートに協力して頂いた方々の人数が思ったよりも少なかったため、次のイベントではどのようにして実際にイカロボット 11 号機を操作して頂いたり、アンケートに協力してくれる方々の人数を増やしていくかを課題として残して終了した。

前期の最後はプロジェクト学習の中間発表の準備を行った。中間発表では、実際の発表と発表する内容の原稿を作成した。そして、中間報告書を作成した。

次は、函館で行われる港まつりのイベントに参加することでイカロボット 11 号機の知名度をあげようとした。

港まつりに参加した理由の一番大きな理由は、大勢の方々が参加をするからであり、そこでは、実際に操作をしていただくことは出来ないが多くの方々にイカロボット 11 号機を見てもらうことが可能であり、港まつりは函館で毎年行われているとても大きな祭りであるため参加をしている人たちだけではなく見に来る方々の人数も多いからでありイカロボット 11 号機の知名度を上げるためにはこれ以上ないいいイベントだと思

い参加を決めた。実際に参加をしてみると、色々な大学の生徒や、家族連れ、地域の組合の方々など、多くの団体の方々も来ていたのでイカロボット 11 号機の良い宣伝になったと思う。

更に、イベントとは違うが未来大学でのオープンキャンパスに参加をして、見に来ていただいた高校生達に大型イカロボの開発と運営というプロジェクトがどのような目的をもってそのためにどのようなことをしているかなどというプロジェクトの説明と共にイカロボット 11 号機の宣伝を行った。高校生などの学生に対して直接イカロボット 11 号機を宣伝できた機会は他にないのでとてもありがたかった。また、実際にオープンキャンパスに来てくれてこのプロジェクトに興味を持ってくれて実際にプロジェクトに入ってくれる高校生たちが増えてくれるとイカロボット 11 号機の知名度の向上などに繋がってくれると思う。

そして、未来大学の学園祭の時にも地域の方々や他の大学の方々が未来大学に来て下さるのでイカロボット 11 号機を知ってもらえるいい機会だと考えたので当日はイカロボット 11 号機を動かすことが出来るようにすることと共に今年新しく作成をしたイカロボット 11 号機のグッズを販売した。イカロボット 11 号機のグッズはノートやボールペンなどの筆記具で高校生などの学生がクリアファイルなどを買って頂き、小学生のお子様自由帳として使うためにノートを買ってくれるなどまずまずの売り上げを出すことが出来た。

次に自分が行ったのは、木古内駅の道の駅でイベントを行っていこうと話し合ったので、実際に木古内駅の道の駅でイベントが行えるかどうか確認をとる必要があるので木古内駅の道の駅の方とのアポ取りと打ち合わせを行った。打ち合わせは、実際に木古内駅の道の駅に行って担当の方と行った。具体的な内容は、イベントを行う日時の決定、さらに、実際にやるイベントの内容に対して許可して頂けるかどうかの確認、道の駅のどれくらいのスペースを貸していただけるかどうかということ話し合った。その話し合いの結果では、塗り絵や着ぐるみなどは大丈夫だが、イカロボット 11 号機のグッズなどの販売は営利目的になってしまうのでグッズを販売することになってしまうと木古内駅の道の駅の使用料を取られてしまうということも話し合いで教えてくれたので打ち合わせの後にイベントの内容の変更や調整などをスムーズに行うことが出来た。さらに、打ち合わせでは当日実際にお借りするスペースを下見してどこにイカロボット 11 号機を置いて、机をどのように配置するのか、塗り絵を行ってもらうスペースをどれだけ設けるかなどイベント当日を細かく想定をして打ち合わせを行った。その後、木古内駅の道の駅でイベントを行うのが決定したので木古内駅の道の駅のホームページに掲載するプロジェクトの紹介や当日行うイベントの情報などをポスターの形式で作成して木古内駅の道の駅のホームページに掲載して頂いた。さらに、イベントの当日に使うイカロボット 11 号機についてのポスターなどを作成した。

その次に行ったのは、五稜郭タワーでのイベントを行う上で行った準備は、小さい子

供も集客する必要があるという結論に至ったので小さい子供にも興味を持ってもらうために塗り絵を取り入れようとしたのでどのようなデザインの塗り絵にするか、いくつの種類の塗り絵を準備するかなどを話し合ったりした。

五稜郭タワーでのイベントの当日は、朝の 10 時から午後 3 時までのイベントを行った。イカロボット 11 号機を実際に動かして、今年度に作成をしたイカロボット 11 号機の着ぐるみを着て観光客の方々にイカロボット 11 号機をアピールしていたが、平日ということもあって観光客の人数が予想を大きく下回るぐらいの人数しかいなかったため、多くの方々にイカロボット 11 号機に興味を持ってもらえたかとはいうことが出来ない結果に終わった。しかし、イベントの準備の際に考えていた塗り絵で小さい子供を集客していこうという計画は予想通りにうまくいった。最初は小さい子供が着ぐるみに興味を持って近くによって来てくれて、その後、塗り絵にも興味を持ってもらえたのでその子供達の両親などもイカロボット 11 号機の傍まで来てくれてほんの少しかもしれないがイカロボット 11 号機に興味を持ってきて実際に操作を試してみたりしてもらっていたので楽しんでくれたと思う。また、イベント後にはプロジェクトでイベントについての反省やイベントにどれだけの方が来てくれたかなどの話し合いなどを行った。最後に行ったのは、プロジェクト学習の最終発表の準備である。プロジェクトの最終発表では企画運営班の一年間の活動内容を詳しく理解して頂きやすいようなポスターを作成した。また、企画運営班のポスター作成の際は、イベントの内容などを書くだけでなく、実際のイベントを行っている写真を載せたりしたので、1 年間行ってきた様々なイベントがどれだけ集客してどのように行われていたのかがイメージしてもらいやすいように作成をした。

(※文責:荒尾元紀)

5.5 井本隆太

5.5.1 プロジェクト内における役割

1 年を通して企画運営班として活動していた。前期では、イカボ 11 号機を函館山の頂上に持っていきたいということになり、実際に函館山に行って、頂上で行うことは可能なのかを関係者の方と話し合った。また、イベントに来た人向けのイカボを操作してみた感想などのアンケート用紙を作成した。またイベント当日も人が来てくれるように呼びかけや操作の補助なども行った。後期は木古内駅でのイベントと五稜郭タワーでのイベントのアポイントを取り、実際に両方の場所まで行き、可能かどうか話し合いをした。また、発表準備では前期は企画運営班のポスターを作成し、後期は発表する担当だったのでどのようにすれば聞きやすいかを考えながら発表した。

(※文責:井本隆太)

5.6.2 課題の概要

4.5 月：先輩方にアドバイスなどをもらいながら一年の目標とどのようなイベントを行

Planning and Management team

いどのように活動していくのかを話し合った。

6月：函館山でのイベントが行えることが確定したので実際に下見に行き、イベントの詳細を話し合い、準備を進めた。下旬に函館山イベントを行った。

7.8月：函館山イベントの反省とアンケート集計を行った。また、港まつりのためのイベント準備を行った。港祭り当日はグッズ班が作成した着ぐるみを着てPR活動を行った。中間発表で使うポスターの作成を行った。

10月：港まつりの反省と次に行う、イベントの話し合いを行った。後期は木古内駅と五稜郭タワーでのイベントを行うために同時進行でアポ取りなどを進めた。

11月：木古内駅と五稜郭タワーへの下見と準備を行った。成果発表の準備も同時進行で進めていった。

12.1月：五稜郭タワーでのイベントを行った。成果発表用のアンケート作成と最終報告書の作成を行った。

(※文責:井本隆太)

5.6.3 担当課題解決過程の詳細

4.5月：イカボ11号機を今年度どのようにしていきたいのかを先輩方からアドバイスをもらいながら話し合った。知名度の向上、老若男女問わず知ってもらえるようなものにしていきたいと考え、その方法を考えながら活動した。先輩方がイカボ11号機の基盤を作ってくれていたため過去資料を見ながらスムーズな話し合いを行うことができた。話し合いの結果、松原教授が知り合いということもあり函館山が観光客も多く集まるため一番いいのではないかと考え函館山へのイベントを行うことにした。

6月：月上旬に函館山でのイベントのために、函館山まで下見に行き、イカボ11号機の設置場所や当日の流れなどを関係者の方と話し合った。また当日用のイカボ11号機を操作してみた感想やイカボという存在を知っていたかどうかのアンケートを作成した。下旬に函館山で実際にイベントを行った。昼から夜にかけて長い時間行おうと考えていたので前半と後半に分かれてイベントを行うことにした。私は前半が担当だったためそこまで多くの観光客の方が来たわけではなかったが100人を超える人にイカボを見てももらえることができた。夜と合わせると約500人を超える人にイカボ11号機と触れ合う機会を作ることができた。作成したアンケートは当日予想を超える人が来てくれたこともあり、あまり多くの人に書いてもらうことはできなかった。アンケート結果では、イカボという名前を聞いたことがない人がほとんどだった。操作の感想としては足だけの動きなど細かい動きなどは見ていてわかりにくかったということが多く寄せられた。もう少しあいさつやつながった動作を多くしてわかりやすくしていかなければならないと感じた。反省点として、当日のアンケートの取り方をもう少し工夫して口頭で簡単な質問にだけ答えてもらうなどしたほうがより多くアンケートを取ることができると考えた。また、時間の使い方をうまくすることができなく、グッズ班との連携もうまく取

ることができなかつたので、最後まで準備に手間取ってしまい慌ててしまう場面があった。もう少しほかの班との連携をしっかりと行い準備をスムーズに行えるようにしていかなければならないと感じた。

7.8月：函館山イベントの反省とアンケートの集計を行った。函館山でのイベントはプロジェクト内での初めてのイベントということで不安要素が多くあったが多くの観光客の方に見てもらうことができ、いい形で終えることができたのではないかと感じた。その後毎年恒例となっている港まつりでのいか踊りのイベントに参加するための準備を行った。当日の段取りなどを確認していたので、スムーズにイベントを行うことができたのではないかと感じた。しかし、グッズ班が作成した着ぐるみを持ってくる際にほかの班との意思疎通がしっかりとできていなく、出発に間に合わなくなる問題が起きた。幸い、パレードの出発が遅れたために間に合うことができたが他の班とのコミュニケーションをしっかりと取らなければならぬと改めて感じた。また、中間発表用の準備を行った。私は中間発表用のポスターを作成した。ポスター作りはいままで使ったことのないものを使い作ったためにかなり時間がかかってしまった。また、時間の都合であまり完成度が高いものを作れなかつたので後期は準備期間をもう少し早めて発表準備にも多く時間を当てたいと考えた。

10月：上で書いた通り、港まつりでの反省点は各班同士のコミュニケーションをとって意思疎通をしていかなければならないという結論に至った。後期のイベントは木古内の道の駅と五稜郭タワーでのイベントを行うという話しになった。ここになった理由としては函館から少し遠い場所を選ぶことや観光客が集まりやすい場所を選ぶことでイカボの名前を様々な人に知ってもらえるのではないかと考えたからだ。木古内ではまだイカボを知らない人などが多くいると考え、五稜郭タワーでは観光客や家族連れなど様々な年齢層に知ってもらえると思いここに決定した。先に木古内駅の方からイベントを行おうと考え木古内駅に実際に電話し企画の説明と下見の日取りを決定した。ここではあらかじめ細かい日程まで決めていたのでスムーズに話しを通すことができた。また12月上旬に最終発表がありあまり時間もなかつたので五稜郭タワーの準備も併せて進めていった。五稜郭タワーに実際に電話をして下見の日取りを確認して当日行うことなどの話し合いを行った。ほかの班との連携は家族向けにイカボの絵を使い塗り絵コーナーを設けるといふ話になりグッズ班と協力して作成した。また、後期ではアンケートの意見などで出ていたつながった動きなどが欲しいという要望があつたので、制作班に頼みあいさつや手を振るといった動作を制作してもらった。

11月：企画書を作成して木古内駅への下見を行った。イカボ11号機の大きさなどから考えてどの場所におけるのかを詳しく話し合った。当日の天候などに左右されない屋内に置かしていただくと考えてその趣旨を説明してギリギリ高さも足りたので屋内での設置が実現した。当日は天気もあまりよくなく数はそこまで多くなかつたが塗り絵コーナーやイカボの着ぐるみなど様々な取り組みにより印象付けることができたのでは

ないかと感じた。当日の反省点としては、室内にイカボ 11 号機を設置させてもらう場合にエアコンプレッサーの音を対処しなければならなかった。大きい音が鳴るので段ボールで覆うなど、工夫をしなければ設置できる場所が制限されてしまう場合があった。また五稜郭タワーの企画では電話したところ五稜郭タワーの一階のアトリウムという開けた場所が借りられるということになり日取りを決めた。日程決めの際に少し話し合うのが遅れてしまったのもあり借りられる日にちが限られてしまっていた。ちょうど空いていたので良かったがそこは反省点としてあげられる。また、五稜郭タワーにイカボを搬送してもらう必要があったため事務の丸山さんと連絡をとって搬送業者に依頼するという事も同時進行で行った。この時に木古内駅との並行で準備を行っていたこともあるが、もう少し早くの準備を心がけることでよりスムーズに話し合いなどを行うことができるのでその改善が必要だった。

12.1 月：五稜郭タワーイベント当日は多くの観光客の人にイカボを紹介することができた。韓国人や中国人の観光客が多かったためホワイトボードなどを使い英語で紹介を作るなどを行った。また着ぐるみを使うことでより親しみを持って接することができたのではないかと感じた。実際に来てくれたほとんどの人が着ぐるみとの写真撮影などを行ってくれたりしていたので知名度効果には大いに期待できると感じた。五稜郭タワーイベント後は成果発表の準備があったので急いで取り掛かった。役割分担をしていたのでポスターやスライドなどは先に作成してくれていたが五稜郭タワーのイベントが少し遅かったためにあまり詳しく五稜郭タワーイベントについて反省することができなかったが反省点としては五稜郭タワー内の場所が広がったので手持ちのポスターなどを作成して呼び込みなどを行えばもう少し多くの人に来ていただけるのではないかと感じた。また、着ぐるみに気を取られてしまいイカボ本体に触ってもらえる機会を少し逃していた場面もあったので、そのイカボの説明もしっかりとしていかなければならないと感じた。最終発表では、読むべき文章をしっかりと暗記し、スライドを指さしながら聞いている人の目を見て大きな声で話すように心がけた。その結果、中間発表よりも評価シートの点数が伸びていた。これは前期の反省を生かして後期にはほかの班やほかの人としっかりと話し合い能動的に動いたことが結果につながったのではないかと感じた。最終報告書ではそれぞれやるべきことを決めて取り掛かった。自分は最後に全員の文章を組み合わせて見せられるように手直しをするということも同時に行った。この時の報告書の反省点としては、全員でそれぞれ役割文体をして書いていたので書式や文字の大きさなどあまり気にせずバラバラになってしまいその手直しに余計な時間を使ってしまった。ここの連携もしっかりと取り効率よく作っていかねばならないと感じたので来年度にしっかりと引き継ぎたいと考えてた。

(※文責:井本隆太)

5.6.4 担当課題と他の班との連携

企画運営班としてアンケート作成をしてイベント時にイカボを操作してみた感想や意見などを聞き、それを制作班に伝えこういう操作が欲しいやこういう風に動かしてほしいなどの要望を出した。また、全体での話し合いでイカボを盛り上げるために着ぐるみを作成しようということになり、グッズ班と連携を取りどのイベントから持っていけるかなどを話し合いながら着ぐるみ作成を行った。

(※文責:井本隆太)

5.6.5 担当課題の評価

今年度は去年の先輩方がイカボ 11 号機の基盤を作ってくれていたのので、前年度以上の知名度向上を課題として活動を行った。高校生に向けたアンケート結果からは知名度が上がったかどうかは数字としては出なかった。しかし、イカボ 11 号機に加えて着ぐるみを使ったイベントで、今までイカボというものを知らなかった多くの人たちにイカボとはどのようなものなのかを紹介することができた。今年度は反省点も多く出てきたのでしっかりと次年度への引継ぎを行うことが大事だと感じた。以上のことから十分とはとても言えなく少し甘い判断だと思うが課題についてはおおむね達成できたのではないかといえる。

(※文責:井本隆太)

6 章 結果

6.1 前期の結果

前期の結果として、函館山のイベントを通じてのイカボを実際に見て触ってもらうことによってイカボの知名度の向上が得られた。函館山のイベントではまずイベントの告知として FM ラジオで宣伝をしてイカボの紹介やイカボのイベントの宣伝を行った。これによって実際に函館山に足を運んでくれた人も数名いた。その他には、ティッシュ配りを行いイカボイベントの存在を知らせた。そして、イベント自体は函館山の観光客が多く集まる場所にイカボを設置し、イカボのポスターを置いたりしてイカボの説明を行うほか、イカボのプロジェクトメンバーが説明を行ったりして多くの人にイカボのことを理解してもらうことができた。また、実際にイカボを動かしてもらうことによって多くの人にイカボに触れ合ってもらうことができた。また、イカボのグッズを陳列してイカボのグッズの PR も行った。それと、同時に函館近郊のゆるキャラの知名度、グッズでほしいと思うもの、イカボを操作してもらったの感想をイカボのイベントに参加してもらった人にアンケートをとった。良かった点としては、イベントを行った日が土曜日ということもあり多くの観光客が集まりその多くが函館以外の人や海外の観光客なので

全国的にイカボの存在を知らせることができた。反省点としては、イカボを操作する際のタッチパネルが操作しづらいという声があり高齢者や子供には操作がしづらかった印象があった。イベント後にはアンケート結果から良かった点、悪かった点を振り返って後期に参考にしていった。

(※文責:佐藤一輝)

6.2 後期の結果

6.2.1 函館港祭り

後期の結果として最初に函館港祭りでイカボのプロジェクトとして参加した。ここで着ぐるみが完成し、イカボ 13 号機と着ぐるみが台車に乗りいか踊りをして多くのギャラリーに見てもらった。このときは、イカボの着ぐるみのお披露目ということもあり多くの人々が注目した。また、テレビにも映りいか踊りを見に来てない人にもイカボのことを見てもらった。

(※文責:佐藤一輝)

6.2.2 木古内イベント

木古内イベントでは、道の駅にイカボを設置し、また着ぐるみで客寄せをし、地域住民を目標にイベントを進めていった。木古内イベントではティッシュ配りをしてイカボの PR やイベントの宣伝を行うほか、イカボの操作やイカボの塗り絵体験を行った。イカボを操作してもらうときには前期に操作しづらかった点を改善し、高齢者や子供にも操作しやすいようにした。また、多くのこどもに塗り絵を体験してもらい、イカボのことを覚えてもらいまた、その家族にも足を止めてもらい家族全員にイカボのことを知ってもらえた。

(※文責:佐藤一輝)

6.2.3 五稜郭イベント

五稜郭イベントでは五稜郭タワーの建物の中にイカボを設置し、イカボの着ぐるみで客寄せし、木古内イベントとは違って函館に来る観光客を目標にイベントを行った。木古内イベントと同様にイカボの操作や塗り絵体験会を行った。予想通りにイカボのイベントに参加する人の多くは函館市外や海外の観光客がほとんどであった。よって、函館以外の人にイカボを PR することができた。反省点として、五稜郭イベントは他のイベントと違って平日の昼から夕方に行ったので思ったより、人の集まりが無かったことが言える。

(※文責:佐藤一輝)

6.3 まとめ

本年度のプロジェクトの目標であるイカボの知名度を上げるという目標に関しては前年度の40%という結果に対し、本年度は35%という結果になってしまった。この理由としては知名度アンケートを取ったのが高校生だけになってしまい知名度の偏りが出たのではないかと考えた。イベント数も例年に比べても変わらないぐらい行い、着ぐるみやテレビ出演、新聞に取り上げてもらうなど知っていただく機会はとでも多く作れたのではないかなと感じた。しかし、高校生という若い世代により多く知ってもらうことも目標としていたので高校生だけでも昨年よりも知名度を上げなければいけないとも感じた。今後の課題としては、若い世代の人に向けて SNS やインターネットといったものをうまく活用して知名度を伸ばしていくことが必要なのではないかと感じた。

(※文責:佐藤一輝)

7章 今後の展望と課題

今後の企画運営班の課題として、まず IKABO の動力である空気圧を調整するコンプレッサーの音を小さくしなければならない。前期に行った函館山イベントのような屋外でのイベントではさほど気にならなかったが、後期に行った木古内道の駅イベントと五稜郭タワーイベントのように屋内で実施したイベントでは建物の管理者から音がうるさいと苦情があった。今後屋内でイベントを実施していくには早急に解決しなければならない課題であると思う。他にはイベントの企画、準備にかかる時間の短縮と反省の時間をより多くもうけることである。来期はプロジェクトの初期の段階から IKABO の着ぐるみがあるため今年度より多くのイベントを行うことが可能であると思われる。たくさんイベントを行うにはそれに応じて準備をできるだけ効率よく行うことが必要である。そのためには1年を通して誰が何を担当するのか役割をはじめから決めておくことが重要であり、そうすることでスムーズに企画運営を行うことが出来るようになる。しかしたくさんイベントを行う中で、イベント内容が単調になってしまいがちであるため一回一回のイベントを振り返り反省する時間を設けて、イベント内容をどんどん改善しよりよいものへと変化させていくことが課題であると考えます。今後の展望としては、まだまだ IKABO が函館の観光資源であるとはいえないため、さらに IKABO の知名度を向上させることが必要になってくる。誰にどの程度まで IKABO に興味を持ってもらいたいのかを明確化し、函館といえば IKABO と言ってもらえるぐらいまで知名度を向上させ IKABO という存在を全国に知らしめていってもらい函館の地域活性に繋げていってもらいたい。そのためにも今年度の課題を来年度のプロジェクトに詳細に引き継いでいきたいと思う。

(※文責:岩田和樹)

付録 相互評価

グループメンバ/Group Member

1015219 市口智幹 Ichiguchi Tomoki

前期は仕事をしない悪いイメージだったがみんながやりたくない仕事を率先してやるので全体を通してみると問題なかった。また、与えられた仕事は責任を持ち役目をしっかり果たしていた。後期はグループリーダーとして他のグループやメンバーを引っ張った。(※文責:岩田和記)

前期後期仕事をしていないイメージだったがみんながやらない仕事を積極的にやるので全体を通してみると問題なかった。分担された仕事は責任感を持って果たしていた。後期はグループリーダーとしてメンバーを引っ張った。(※文責:井本隆太)

前期と比べて後期はグループリーダーとして積極的に自分の役割を果たしていた。また、イベント当日は積極的に観光客や地域の方々と交流を図り、広報活動である TV 出演の際はイカボの知名度を向上させようと自分から情報を発信していた。

(※文責：岩田和樹)

前期と違ってグループリーダーとして積極的に意見を言ったりしてグループのメンバーをまとめていた。(※文責：荒尾元紀)

大まかな流れや仕事の分担などを行っていた。後期はグループリーダーとしてメンバーを引っ張ってくれていた。また、イベント当日などは地域の人との交流を積極的に行っていた印象がある。(※文責：佐藤一輝)

1015198 岩田和記 Iwata Kazuki

前後期通して安定して仕事をこなしていた。割り当てられていない仕事や誰もやりたがらない仕事を率先してやってくれた。自分の仕事だけではなくリーダーのサポートや他のサポートができていた。(※文責:井本隆太)

一年を通して積極的に役割を果たし、質の高い仕事を行っていた。自分のことだけでなく、順調でない部分があれば自分から手助けするなど、周りへのヘルプもしっかりできていた。(※文責：岩田和樹)

Planning and Management team

前期同様に色々な仕事を積極的にこなしていた。周りのメンバーのサポートなども積極的にやっていた。(※文責：荒尾元紀)

前期、後期ともにまんべんなく仕事を行っていた。手が足りないところなどを積極的に行っていたので助かった。(※文責：佐藤一輝)

周りのサポートを積極的に行っていた。スライドなどを積極的に作ってくれたので発表の時にも助かった。(※文責：市口智幹)

1015070 岩田和樹 Iwata Kazuki

前期はプロジェクトのリーダーとして他のグループやメンバーを引っ張っていた。責任感の強さとリーダーとしての自覚が十分にあり、安心感を持ってプロジェクト活動に専念することができた。(※文責:岩田和記)

前期はプロジェクトリーダーとしてメンバーを引っ張っていた。他のメンバーの状況を理解し自分から進んで動いてくれた。イベント企画会議ではしっかりと仕切り司会進行できていた。(※文責:井本隆太)

前期はプロジェクトリーダーとして沢山の仕事をこなしていた。後期はリーダーではないがそれに劣らないぐらい仕事をしていた。(※文責：荒尾元紀)

前後期ともに質の高い仕事をしていた。発表物など作った際の完成度がとても高かった。(※文責：佐藤一輝)

前期はプロジェクトリーダーとして全体を引っ張ってくれていた、質の高い仕事を常にしてくれていたのでもとても助かった。(※文責：市口智幹)

1015207 佐藤一輝 Satoh Kazuki

前期はグループリーダーとして活動していた。中間報告書の作成においては誰よりも責任感を持ち、みんなの為に頑張って取り組んでいた。与えられた仕事はしっかりとこなしていた。(※文責:岩田和記)

与えられた仕事を一緒に責任を持って終わらせた。責任感があり、ペアで仕事を進めやすかった。また、前期はグループリーダーとして活動していた。中間報告書の作成は私と二人でみんなの為に頑張って取り組んだ。(※文責:井本隆太)

Planning and Management team

割り振られた仕事に責任を持って取り組んでいた。アンケート作成やポスター作成など重要な仕事をしっかりこなし、イベント当日も積極的に周りとのコミュニケーションをとっていた。(※文責：岩田和樹)

前期はグループリーダーとして仕事をしていた。後期も頑張っている仕事をしていました。

(※文責：荒尾元紀)

グループリーダーとしてやらなければならないものを見極めてしっかりとメンバーに指示をすることができていた。中間報告書の作成に力を入れてくれていた。

(※文責：市口智幹)

1015024 荒尾元紀 Arao Motoki

与えられた仕事をこなし、役目をしっかりと果たしていた。前後期しっかり出席していた。(※文責:岩田和記)

後期はとても活躍していた。言われた仕事はきっちりでもないがこなしてくれるので安心感があった。一年間、毎週出席していた。(※文責:井本隆太)

プロジェクト活動にしっかり参加し、ポスター作製やイベントの準備などに貢献していた。割り振られた仕事を最終的には期限までに終わらせてくれたため、助かった。

(※文責：岩田和樹)

与えられた仕事をしっかりと行い責任感を持って仕事をしていました。(※文責:佐藤一輝)

自分の仕事をしっかりと行っていた。イベント時では積極的に声かけなども行っていた。

(※文責：市口智幹)

1015178 井本隆太 Imoto Ryuta

後期の活動では班の中で一番活躍していた。割り当てられていない仕事や誰もやりたがらない仕事を率先してやってくれるので他のメンバーもかなり助けられたと思う。

一年間、自分の仕事だけではなくリーダーのサポートや他のメンバーのサポートをし続けていた。(※文責:岩田和記)

一年を通して積極的に役割を果たしてくれていた。担当者との連絡や、イベントの打ち合わせなどコミュニケーション能力が必要な場で活躍し、リーダーやメンバーのサポートもこなしていた。(※文責：岩田和樹)

Planning and Management team

後期はグループの中で一番仕事をしていた。(※文責：荒尾元紀)

与えられた仕事をしっかりと行い、ほかのメンバーのサポートを行っていた。

(※文責：佐藤一輝)

前後期ともに仕事をよくしてくれていた。ほかの人がやりたがらないことも積極的に行ってとても助かった。(※文責：市口智幹)